

## 東京都レッドリスト(本土部)2020年版の概要及び野生生物種の主な減少要因

### 1. 概要

右表のとおり。

### 2. 主な内容

#### (1) 都内の絶滅種

本土部全体での絶滅種は207種であり、新たな絶滅種は、植物、昆虫、貝類の計80種である。

その多くが、池沼、水田、湿地等の水辺環境に生育、生息する種であり、こうした環境の減少に加え、農薬や外来種等による影響が懸念されている。

例) 植物：32種(湿地性の種：デンジソウ、ヤナギスブタ、ミズアオイ、アゼオトギリ等  
山地性の種：オオヤマザキシソウ等)

例) 昆虫：47種(湿地性の種：ガムシ、クロゲンゴロウ、オオセスジイトトンボ等)

\*) 昆虫は、過去の生息記録等の精査により、今回改めて絶滅種と判断された種も多い。

改訂年次 分類群	1998年版	2010年版	2020年版		
	掲載種	掲載種	掲載種	新規掲載種	削除種 <sup>2)</sup>
植物	642	800	941	177	36
藻類	対象外	対象外	31	31	0
哺乳類	31	37	42	5	0
鳥類	107	162	162	10	10
爬虫類	13	14	13	0	1
両生類	14	15	15	0	0
淡水魚類	37	38	52	16	2
昆虫類	459	394 <sup>1)</sup>	444	179	129
甲殻類	対象外	15	22	8	1
クモ類	対象外	33	36	3	0
貝類	対象外	71	87	18	2
合計	1303	1579	1845	447	181

1) 昆虫類は2010年版策定時にカマキリ目、ハチ目等計6グループを追加

2) 今回の調査の中でランク外(絶滅リスクが低い)と再評価された種など

表1 東京都レッドリスト(本土部)掲載種の経年変化

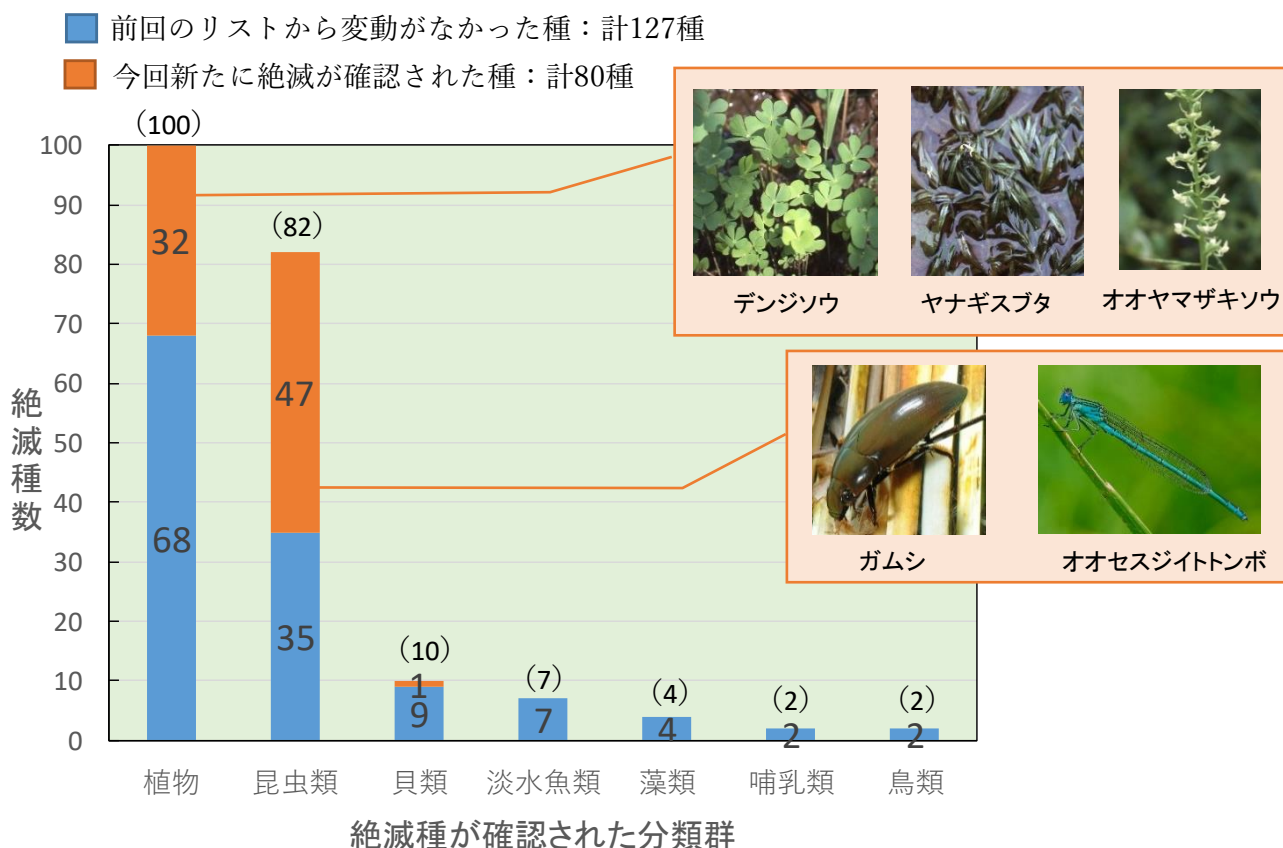


図1 東京都レッドリスト(本土部)2020年版における絶滅種

## (2)新たにリストに追加された種:447種

例) ドジョウ (淡水魚,DD) : 水田、氾濫原環境の消失や異なる地域産の放流等による。

例) ホオジロ (鳥類,NT)、セッカ (鳥類,VU)

: 耕作地の減少や河川敷の改変等による草地の減少等が影響

例) イワヤナギシダ (植物,CR) : 南方系の種の都内新産地が見つかり、当該種の新たな北限となる。

例) クビワコウモリ (哺乳類,EN) : 今回の現地調査により都内での生息が初確認された。

## (3)自然再生活動等により絶滅種が復活した事例

市民協働で行われた公園池での“かいぼり”や、その後の継続的な外来種対策等により、都内で絶滅したと考えられていた植物等が野生復活した。いずれも 60 年程前に絶滅した種が、埋土種子等から発芽し復活したと考えられている。

例) イノカシラフラスコモ (藻類) : 都立井の頭恩賜公園, 井の頭池, 2016 年復活, 59 年ぶり

例) ミズユキノシタ (植物) : 八王子長池公園, 長池, 2020 年復活, 61 年ぶり

## (4)植物種からみた地域区分毎の経年変化

### ■ 西多摩

近い将来における絶滅の危険性が高い絶滅危惧 I 類が 215 種から 405 種と 2 倍程度増加。その要因として、山地での ニホンジカによる食害の影響が指摘

### ■ 南多摩

絶滅危惧 I 類が 154 種から 316 種と 2 倍程度増加。丘陵地での開発による 水田・湿地・草地の消失や 里山環境の荒廃が懸念

### ■ 北多摩

絶滅種が 112 種と多く、絶滅危惧 I 類は 79 種から 153 種と増加。武蔵野台地での 宅地化による 樹林・草地の減少が懸念

### ■ 区部

絶滅種が 188 種と極めて多く、絶滅危惧 I 類は 41 種から 105 種と 2.5 倍程度に増加。1950 年以降の開発が著しく、湧水湿地や沿岸河口部に広がっていた 塩生湿地が改変されるなど多様な環境が消失

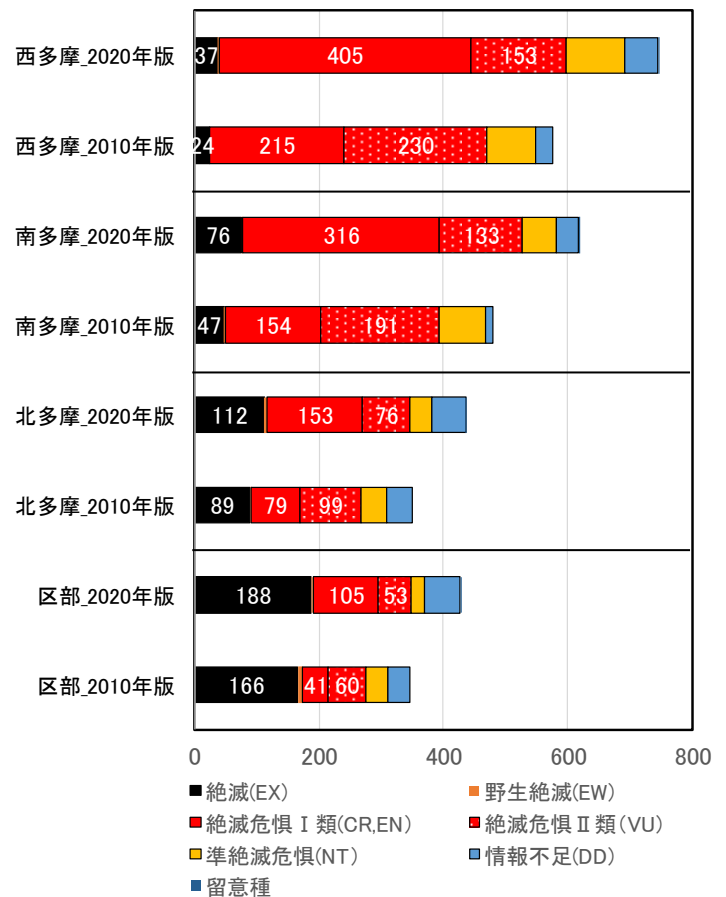


図2 地域区分毎の掲載種の経年変化(植物)

### (参考) 今回の改定作業について

- ・平成 30 年度から 3 ヶ年をかけて、文献調査、ヒアリング調査に加えて、現地調査を実施
- ・「東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部)」改定に関する検討会」を設置し取りまとめた。
- ・検討会の下に、「植物」、「藻類」、「哺乳類」、「鳥類」、「爬虫類・両生類・淡水魚類」、「昆虫類」、「その他無脊椎動物」の 7 つの専門部会を設置し調査、検討を実施

### 3. 野生生物種の主な減少要因について

#### (1) 池沼、水田、湿地環境の消失、里山環境の荒廃による影響

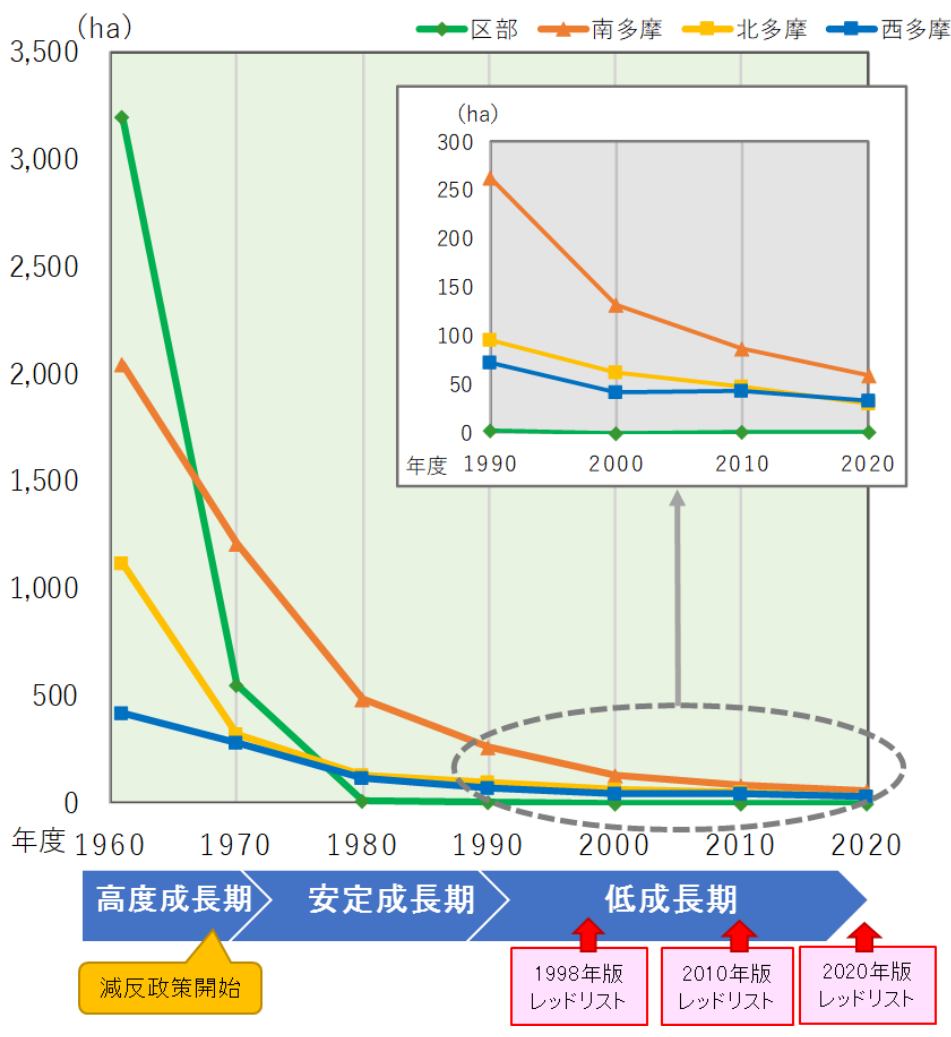
都市開発等による面的な消失に加え、耕作されなくなった水田の増加や湿地の乾燥化など、多様な生き物を育ててきた里山の急速な荒廃が進んでいる。多くの野生生物種の減少要因となっている。

#### ■ 都内の水田の作付け面積の経年変化(図3参照)

高度経済成長期の都市開発とともに急激に減少し、特に区部では1980年までにほとんどが消失。比較的水田が残る南多摩でも、今なお減少傾向が続いている。

#### ■ 水田に生育、生息する野生生物の状況

水生植物や水生昆虫等の絶滅の主たる要因となっており、水田等を生息地とするカエル類(トウキョウダルマガエル, EN等)の絶滅リスクも年々上がっており、都内に生息する在来の両生類15種全てが掲載種となった。水田や氾濫原湿地を生息地としているドジョウ(淡水魚, DD)も、これまで普通種と考えられていたが、近年、絶滅のリスクが懸念されている。



トウキョウダルマガエル



ドジョウ



水田や雑木林が広がる里山

図3 本土部の地域別水田作付面積の推移

(「東京農林水産統計年報」(関東農政局統計部) および総務省統計局ホームページ掲載の「作物統計調査」水稲作付面積を参照し作成)

## (2) ニホンジカの食害による影響

西多摩や南多摩の山間部を中心に、近年、ニホンジカによる食害が広範囲かつ顕著に進行している（図4参照）。特に被害が目立つのは林床植物や草原性植物（ヤナギラン（西多摩, EN）、マツムシソウ（西多摩, CR）、コオニユリ（西多摩, CR）等）であるが、ニホンジカは不嗜好性以外のほとんどの植物を採食するため、山地の植生全般に著しい影響を与えている。

こうした山地の植生変化は、山地性チョウ類の食草や吸蜜植物の減少にも影響を及ぼしており、ヘリグロチャバネセセリ（昆虫, EN）等の個体数の減少にもつながっている。



ヤナギラン



ヘリグロチャバネセセリ



植生回復対策として設置されたシカ柵

\*)写真左側はシカの食害により林床植物が消失

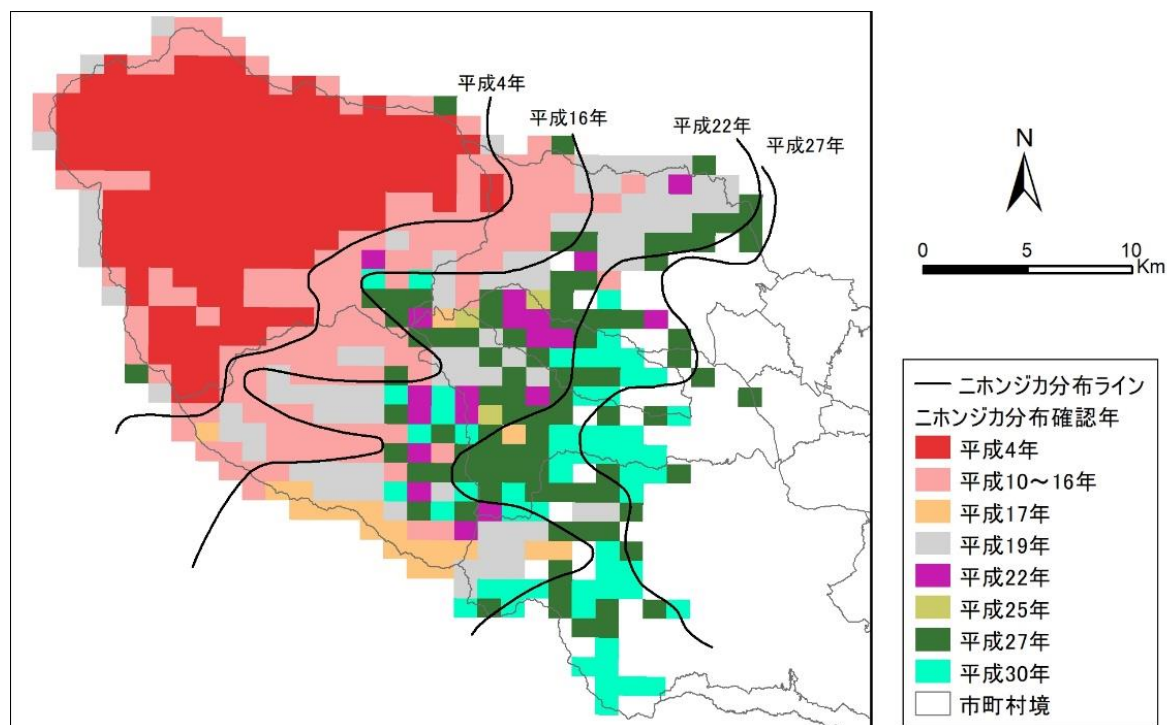


図4 聞き取りによる目撃例から推定したシカ分布

（「第5期東京都第二種シカ管理計画」、「令和2年度東京都シカ管理計画年間実施計画」より作成）

## (3) その他の減少要因

- ・野生化した外来種（アライグマ、コクチバス等）による捕食や被圧
- ・他地域産個体の導入による在来個体群との交雑や置き換わり
- ・販売目的の採集やマニアによる写真撮影等による環境かく乱
- ・人の手で適度に管理されてきた里山の荒廃（水田・湿地の乾燥化、草地の樹林化等）
- ・近年頻発している集中豪雨や台風による河川環境の変化 等